



(仙 台)

新田遺跡は多賀城市の西端部に位置しており、古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。本遺跡の立地する多賀城市西部は、仙

宮城・新田遺跡

1 所在地 宮城県多賀城市山王字北寿福寺

2 調査期間 一 一九八六年(昭61)九月～一九八七年三月
二 一九八七年四月～十二月
三 一九八八年四月～九月

3 発掘機関 多賀城市教育委員会

4 調査担当者 一 千葉孝弥 敬
二 千葉孝弥・石本 敬
三 石川俊英・石本 敬

5 遺跡の種類 集落・居館跡

6 遺跡の年代 古墳時代
～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

新田遺跡は多賀城市の西端部に位置しており、古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。本遺跡の立地する多賀城市西部は、仙

台平野の北東端部にあたり、仙台市東部から続く広い沖積地の一部を占めている。そのうち、JR東北本線岩切駅から特別史跡多賀城跡にかけての県道泉・塩竈線沿いの地域は、東西に細長い微高地となっている。この微高地は、七北田川や砂押川の旧河道によって形成された自然堤防と考えられており、標高は五～六mである。

中世の遺構としては一二世紀から一六世紀にかけての武士の屋敷群を発見している。特に寿福寺地区においては、一五世紀以降、南北二九〇m東西二二〇～一九〇mの範囲に幅約八mの大溝を巡らした屋敷群が出現し、本遺跡周辺地域における中心的な施設と考えられる。一三・一四世紀を中心とした中国・国産の陶磁器が多量に出土しており、七北田川対岸の仙台市岩切地区とともに中世陸奥国府の推定地として注目されている。

一 第五次調査

大溝をめぐるした屋敷群の北西隅を確認し、その北西部に隣接した小規模な屋敷を調査した。この調査において大溝から木簡二点が出土した。大溝には四時期の変遷があり、木簡はいずれも最も新しい時期の埋土中から出土した。年代は一六世紀後半頃と考えられる。

二 第六次調査

大溝をめぐるした屋敷群のうち、その北辺に面した二つの屋敷を調査した。この調査において大溝から木簡一点が出土した。第五次調査における出土地点より約一五m東側であり、二～四時期目のい

ずれかに伴うものである。年代は一五世紀から一六世紀後半である。

三 第八次調査

大溝をめぐらした屋敷群の北辺に隣接した、小規模な屋敷を調査した。掘立柱建物の南側に井戸や土坑の集中する範囲があり、そのうちの長径一・七m短径一・五m深さ約一mの、円形の土坑から木簡一点が出土した。年代はおおよそ中世である。

8 木簡の釈文・内容

一 第五次調査

- (1) 〔南カ〕
(127)×(36)×10 061

- (2) 
(126)×57×8 061

(1)は小形の五輪塔婆である。空輪・風輪・火輪・水輪を削り出しており、それぞれに一文字ずつ記されている。地輪以下は欠損している。出土した時点で墨はすべて剥落していたが、墨のあった部分のみは材の劣化が少なく、かすかな盛り上がりとなって文字が確認できる。

(2)はへら状木製品に墨書されたものである。墨書は一文字であるが判読不能である。

二 第六次調査

- (1) 〔カ〕 大日如来」
245×23×2 061

頭部が圭頭状であり、下端部は尖っている。薄く幅の狭い材を用いたもので、いわゆる笹塔婆と呼ばれるものである。文字は良好な状態で残存している。

三 第八次調査

- (1) 

270×54×6 061

頭部が圭頭状であり、下端部は尖っている。二(1)に比べ幅が広く、中世の物忌札の形態に類似している。頭部から中央にかけて墨痕が確認されるが判読できない。裏面にもわずかに墨痕が認められる。

9 関係文献

千葉孝弥「考古学からみた中世の多賀城」(『多賀城市史』一 原始・古代・中世 一九九七年)

(千葉孝弥)



一(1)

一(1) S=1/2
二(1) S=1/3



二(1)